

令和元年度・令和2年度
地域連携推進事業
活動報告書



九州国際大学地域連携センター

令和元年度

地域連携推進事業活動報告書

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

- 「黒崎商店街のサステナビリティ・デザインに
関する産官学協働事業」…………… 1
法学部准教授 花松 泰倫
- 「“九国大のある街”
八幡地区の地域活性化に関わる取り組み第5期」…………… 5
現代ビジネス学部教授 三輪 仁
- 「新たなサービスのとらえ方に関する共同研究
～理美容業をモデルとした価値共創の実現～」…………… 9
現代ビジネス学部 教授 村上 真理
- 「教育のまち黒崎推進事業」…………… 13
法学部助教 藤野 博行
- 「小倉祇園観光案内ボランティア」…………… 17
現代ビジネス学部教授 福西 和幸
- 「JFA なでしこひろば in 九州国際大学
～スポーツで地域交流～ グラウンド・ゴルフ」…………… 21
現代ビジネス学部助教 木下 温子
- 「学生および地域の子どものための
シビックプライド醸成・地域活動参加促進事業」…………… 27
現代ビジネス学部助教 桒畑 恭介

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	黒崎商店街のサステナビリティ・デザインに関する産官学協働事業
連携団体名	黒崎商店街連合会 北九州市産業経済局商業・サービス産業政策課
団体代表者氏名	田中大士 原信二郎
本学教職員氏名	花松泰倫（法学部准教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>黒崎地区の中心でありシンボルでもある黒崎商店街は近年その衰退が顕著であり、通行量の減少や空き店舗数の増加などに強い懸念が示されている。しかし、黒崎商店街の未来図を誰がどのように描き、実現していくのか、商店街を黒崎地区にとってどのような空間として位置づけていくのかについて、ステークホルダーの間で共有されるイメージや具体的計画が存在しているとは言えない。そこで本学の教員学生、黒崎商店街連合会、北九州市役所の連携によって、黒崎商店街の持続性ある未来イメージを構築するサステナビリティ・デザイン、およびそのための予備的調査やイベント企画実施による商店街活性化を目指した産官学協働事業を試みるに至った。</p>
取組概要	<p>本地域連携事業は、①黒崎商店街連合会を中心とした地域組織とその構成事業者、行政サービスの観点から商店街を支える北九州市役所とともに行う産官学の協働事業により、持続可能な黒崎商店街の未来を商店街関係者とともにデザインし創出する基盤を構築する②そのための予備的調査や合意形成プロセスの実施をゼミや実習という形で本学法学部学生自身が担うことで、学生の地域社会に対する感受性と責任感、リーダーシップ力を育て、人口減少時代に対応できる人材を育成することを目的とし、以下の6つの事業を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 黒崎商店街の運営サイドの課題に関するインタビュー調査と情報発信 <ol style="list-style-type: none"> 黒崎商店街個店主・団体・企業へのヒアリング調査 商店街および個店の魅力に関する情報発信 黒崎商店街の消費者利用実態に関するアンケート・インタビュー調査 <ol style="list-style-type: none"> 「子どもの館」利用者に対する黒崎商店街利用に関するアンケート調査 JR 黒崎駅利用者に対する黒崎商店街利用に関するアンケート調査 「黒崎こども商店街」イベントへの運営・マネジメント・企画参加 <ol style="list-style-type: none"> 「黒崎こども商店街」の運営マネジメントへの参画 「黒崎こども商店街」における「安心安全パーク」イベント実施

事業 (活動) 内容	<p>1. 黒崎商店街の運営サイドの課題に関するインタビュー調査と情報発信</p> <p>(1) 黒崎商店街個店主・団体・企業へのヒアリング調査 黒崎商店街の現状、魅力、課題等について、商店街で事業を行う個店主および商業施設企業などを対象にインタビュー調査を行った。本調査は、法学部の演習科目「専門演習 A」(花松ゼミ)の学生 18 名が 3 グループに分かれ、黒崎商店街連合会によるコーディネートを受けながら 6 月 21 日(金)に 9 店舗へのインタビュー調査を実施した。本調査の結果はゼミ活動のなかで学生が取りまとめ、黒崎商店街連合会へ報告を行った。</p> <p>(2) 商店街および個店の魅力に関する情報発信 上記(1)のインタビュー調査をもとに、黒崎商店街全体あるいは各個店が誰に対してどのような魅力を有するのかを明らかにするために、法学部「専門演習 A」(花松ゼミ)の学生 18 名が商店街 9 店舗に聞き取り調査を行い、インタビュー記事を黒崎商店街の情報発信ウェブサイト「くろさきナビ」に掲載した(3 月末より一旦削除)。</p>
	<p>2. 黒崎商店街の消費者利用実態に関するアンケート・インタビュー調査</p> <p>(1) 「子どもの館」利用者に対する黒崎商店街利用に関するアンケート調査 「子どもの館」利用者を対象とした黒崎商店街の利用実態に関するアンケート調査について、北九州市立「子どもの館」の協力を得る形で、法学部「リスクマネジメント実習」の履修学生 9 名が質問用紙を作成し、7 月 24 日(水)および 10 月 26 日(土)に対面型のアンケート調査を実施した。その結果、30 代、40 代に多い利用者の多くは黒崎商店街を利用しており、利用目的の大半が買い物であること、さらに子供を連れて行けるようなお昼の飲食店が欲しいという意見、無料駐車場が欲しいという意見もあり、車が使えれば子供連れの利用者層でも商店街を利用しやすいと考える利用者が多いことがわかった。調査分析結果については黒崎商店街連合会、北九州市等に報告した。</p> <p>(2) JR 黒崎駅利用者に対する黒崎商店街利用に関するアンケート調査 一般消費者の観点から黒崎商店街がどのように捉えられているのかを明らかにするために、コムシティ・黒崎メイトと連携し、北九州市ひとみらいプレイス事務局の協力を得て、JR 黒崎駅のペDESTリアンデッキにてインタビュー調査を実施した。法学部「リスクマネジメント実習」の履修学生 8 名が質問用紙を作成し、7 月 24 日(水)および 10 月 26 日(土)に対面型のアンケート調査を実施した。その結果、親子連れ、家族向けの施設を増やしてほしいという意見が最も多くみられ、無料の駐車場設置の要望がその次に多くみられた。他にも黒崎商店街に来る目的のようなものがない、商店街の店舗地図を設置してほしい、「黒崎商店街=○○」というような目玉となる商品や施設があればよいのではないかとのご意見も頂いた。調査分析結果については黒崎商店街連合会、北九州市等に報告した。</p>

	<p>3. 「黒崎こども商店街」イベントへの運営・マネジメント・企画参加</p> <p>(1) 「黒崎こども商店街」の運営マネジメントへの参画 黒崎商店街が主催する最も大きなイベントである「黒崎こども商店街」(2019年11月9日開催)において、イベントの運営マネジメントに法学部「リスクマネジメント実習」履修学生10名、および法学部演習科目「専門演習A」(花松ゼミ)の学生3名が実行委員会の一員として関与し、5月より商店や企業への協力要請を中心とした渉外業務や広報活動、特別企画の計画と実施、当日ボランティア学生の指揮統率などを行った。特に、当日イベントとして「黒崎こども総選挙」企画を実施し、別日に黒崎商店街で行われた子供向けイベントの内容を参加児童の投票によって決める企画の計画、準備、実施、集計等をすべて学生主導で行った。その結果、参加児童1500名中1096票の投票数を獲得し、「黒崎こども商店街」の成功に大きな貢献を果たした。また選挙結果を受けて、11月23日に黒崎商店街において「黒崎こども実験教室」企画を行い、約200名ほどの親子連れで賑わった。</p> <p>(2) 「黒崎こども商店街」における「安心安全パーク」イベント実施 「黒崎こども商店街」の中の1つのイベントとして、法学部「リスクマネジメント実習」履修学生25名が地域の子供達を対象とした防犯セミナー・防災セミナーを実施した。防犯セミナーでは、環境犯罪学の知見を応用した劇やクイズなどを実施し、子供達に「犯罪に遭わないための力」を身につけてもらうことを意図した企画を実施した。また、防災セミナーでは、災害についてのクイズやAEDの使用法、応急処置についての指導などを実施した。合計200名ほどの児童が参加し、「黒崎こども商店街」の成功に大きな貢献を果たした。</p>
効果・結果	<p>以上の活動により、以下の効果、結果および見通しが得られた。</p> <p>① 黒崎商店街の個店へのインタビュー調査により、各事業者が商店街の未来に対してどのような展望、問題を持っているのかが明らかになった。また、学生主導のインタビュー調査および情報発信サイトへの記事掲載により、本学と商店街事業者、黒崎商店街連合会との信頼関係構築に成功した。</p> <p>② 黒崎商店街利用実態に関するインタビュー、アンケート調査により、黒崎商店街を利用しない理由、黒崎商店街の活性化に必要な利用者ニーズを明らかにすることができた。また黒崎商店街連合会への結果報告によって、本学との信頼関係醸成に成功した。</p> <p>③ 「黒崎こども商店街」でのイベント企画実施および参加によって、黒崎商店街の活性化に一定程度の貢献ができた。この貢献を基盤として商店街関係者に対する本学のプレゼンスの向上、信頼関係醸成に成功した。さらに次年度以降の発展的な連携事業開始の大きなステップになった。</p> <p>以上の結果より、本学学生の教育効果を内在化させた産官学協働事業の基盤が確立し、次年度以降の連携事業の発展が大いに期待される。</p>

【活動に関する URL】

・九州国際大学ニュース（法学部より）「黒崎商店街でフィールドワークを行いました（法学部 花松ゼミ）」

<http://www.kiu.ac.jp/2019/06/14/黒崎商店街でのフィールドワーク（法学部-花松ゼミ/>

・九州国際大学ニュース（法学部より）「黒崎こども商店街で「黒崎こども総選挙」を実施！（法学部リスクマネジメント実習）」

<http://www.kiu.ac.jp/2019/11/29/黒崎こども商店街で「黒崎こども総選挙」を実施/>

・黒崎こども商店街 2019「九州国際大学 presents 黒崎こども総選挙」

<http://kurosaki-kodomo.net/黒崎こども総選挙/>

【活動写真】



黒崎商店街での現地調査



黒崎商店街個店へのインタビュー調査



商店街利用実態のインタビュー調査



商店街利用実態のアンケート調査



「黒崎こども総選挙」イベント




「安心安全パーク」イベント

活動記録

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	“九国大のある街” 八幡地区の地域活性化に関わる取り組み第5期
団体名	①八幡駅前開発株式会社、②ホビースペースアイン
団体代表者氏名	①井上龍子 ②有永琢哉
本学教職員氏名	三輪 仁（現代ビジネス学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>申請者はこれまで5期に渡り本助成を受けて、本学が立地する八幡駅前・国際通り地区、平野地区を主たるフィールドとした学生の地域活動を展開してきた。活動においては、連携先団体の協力と指導を受け、学生が主体的に活動の企画・運営や企画に携わる経験を積ませていただいている。</p> <p>こうした地域活動は本学の地域貢献という観点からも意義があったとともに、学生に対し大学周辺地域への関心を喚起するという観点からも大いに意義があると考えます。</p> <p>本年度の新たな取り組みとして、八幡東区の産官学芸の連携イベントである、八幡アートフォレストに本学を代表する形で参加することになった。</p> <p>また、八幡駅前開発株式会社からの提案を受けて、八幡地区の企業が社会活動を連携して行う団体八幡夢みらい協議会の後援による、西日本工業大学水野研究室とゼミ連携活動を行うことになった(11月橘祭、2月まち歩き)。</p>
取組概要	<p>◎本年は2つの連携先団体に対し、以下に挙げる各活動を展開した。</p> <p>◆八幡駅前開発株式会社</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各月 「つながる絆！八幡実行委員会」会合への三輪と学生代表の出席 ・Yotteco YAHATA(11月15日) イルミネーション事業など八幡駅前・国際通り地区のにぎわいづくりへの参加 ・八幡夢みらい協議会、西日本工業大学デザイン学部水野研究室 <ul style="list-style-type: none"> 11月24日橘祭立体おりがみで八幡の建物をつくろう 2月8日八幡 FUN WALK（まち歩きイベント） <p style="text-align: center;">西日本工業大学・水野研究室との連携企画</p> <p>◆ホビースペースアイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月の平野文化祭への企画出展 ・西本町児童館でのボードゲーム遊び

事業 (活動) 内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10月6日 平野文化祭でのボードゲームコーナー実施 ・ 11月15日 Yotteco Yahata JICA体育館で行われた国際通り及び皿倉山山頂のイルミネーション点灯開始イベントの進行・運営補助、出店 ・ 11月24・25日九州国際大学橋祭での地域連携企画の実施 お化け屋敷、子供向け迷路ゲーム(1号館3・4階) 立体おりがみで八幡の建物をつくろう(食堂) ・ 2月8日 YAHATA FUN WALK (まち歩き)
効果・結果	<p>本年度は、八幡東区の産官学芸の連携したアートプロジェクトである「八幡アートフォレストパレットの樹」の取り組みに本格的に参加したことで、八幡駅前・国際通り地区にとどまらない区全体での地域ブランド向上やシビックプライドの醸成の活動に参画する機会を得た。本年度は単発イベントの実施にとどまったが、次年度以降よりアートフォレストというイベントそのものの本格的に、学生とともに取り組むと考える。</p> <p>また、西日本工業大学水野研究室とのコラボレーション活動は、立体おりがみは児童、まち歩きでは多世代向けと性格の異なるイベントではあったが、それぞれの学生の特長を活かした異なるアプローチでテーマに取り組み成果を出すことができた。</p>
活動記録	 <p>八幡アートフォレスト打ち合わせでの学生発表</p>

活
動
記
録



中はとアートフェスティバル 2019
パレットの樹
**立体折り紙で
八幡の建物を
作ってみよう!**

主催
 九州国際大学 地域づくりコース
 三輪ゼミ
 ×
 西日本工業大学 デザイン学部
 水野研究室

連絡・申込先
 九国大・三輪
 TEL&FAX 093-671-8931
 Mail miwase@mar.kiu.ac.jp
 @yahoo.co.jp

日時：11月23日（土）
 10：00～12：00

場所：九州国際大学学生食堂
 参加無料（事前に電話・FAX・メールで上記まで
 申し込み下さい）

対象：小学生以下

立体おりがみで八幡の建物をつくろう（11月23日）



2月8日「YAHATA FUN WALK」

私たちが暮らす八幡の歴史を、
 歩きながら学ぶ

**八幡
FUN
WALK**

2月8日（土）13時00分～16時00分
 @ 旧百三十銀行ギャラリー
 <募集定員>20名 <対象>小学生3年生～大人

主催
 九州国際大学 現代ビジネス学部地域づくりコース
 西日本工業大学 デザイン学部水野研究室

普段行けない場所を見学できるかも?

ギャラリーを起点・終点に八幡を散策
 →西工大・九国大の学生がガイドします！

ギャラリーに帰って振り返り

ゲスト講演
 講師 山脇直祐氏（北九州市立大学非常勤講師）
 テーマ「八幡とは何だろうか」

旧百三十銀行ギャラリー
 北九州市八幡東区西本町1-20-2
 TEL/093-661-9130

参加無料、要事前申込（裏面の参加申込書をご活用ください。）
 【お問合せ】KEYAKI TERRACE YAHATA [ケヤキ テラス ヤハタ]
 (事務局) 八幡駅前開発株式会社 担当：前田
 TEL/093-681-0697 FAX/093-681-0699 (平日9時00分～17時30分)

共催
 八幡夢みらい協議会
 YAHATA Green & Future Council
 KEYAKI TERRACE YAHATA

※悪天時はギャラリーでのワークショップ等に変更となる場合があります。

連絡先

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	新たなサービスのとらえ方に関する共同研究 ～理美容業をモデルとした価値共創の実現～
連携団体名	北九州市立高等理容美容学校
団体代表者氏名	千々和 隆生 氏（校長）
本学教職員氏名	村 上 真 理（現代ビジネス学部 教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>Grönroos[1]によると、相互作用の概念を徹底的に理解することなくして、価値共創の性質や内容は特定できないという。ここで言う共創とは、2 つまたはそれ以上の行為者が直接的な相互作用プロセスで共に何かを想像するプロセスである。そこで行為者らのプロセスが、協働的で対話的なプロセスに融合する。村松[2]は価値共創について、顧客の消費プロセスに焦点を当て、そのプロセスですべてを考え行動するものであるとしている。それは、サービスの特性である生産と消費の同時性を推進していくものに他ならない。そして価値共創における研究課題として、①消費プロセスにおける顧客の消費行動、②企業と顧客の共創プロセス、③顧客の消費プロセスで行うマーケティング、④共創される文脈価値、の4点を挙げている。</p> <p>以上のような課題認識に基づき、本事業では北九州市立高等理容美容学校（以下、KBB）との本格的な事業コラボレーションを展開した。特に、令和元年度は事業開始から3年目となることから、当年を「仕上げの年」と位置付け、アカデミックな面からの理論検証も試みている。その結果、価値共創研究のモデルケースとして評価できる成果を得た。</p> <p>[1]Grönroos,C,The service revolution and its marketing implications: service logic vs service-dominant logic,<i>Marketing Service Quarterly</i>,24(3) pp.206-229, 2014. [2]村松潤一『価値共創とマーケティング論』同文館出版,2015年.</p>
取組概要	<p>具体的な取り組み事項は以下のとおりである。なお、④・⑤については、本学が単独で対応した。</p> <p>①KBB での授業見学、ならびに学生同士の意見交換会。 ②本学と KBB との共同ゼミ。 ③本学「橘祭」でボランティアサロン『晩秋にまどろむ 第二幕』の共同出展。 ④事業担当者のゼミ生による美容サロン『WISTARIA FIELD』での調査。 ⑤日本経営診断学会全国大会での研究成果の報告。演題は「相互作用と価値共創に関する事例研究 ～理美容業のジョイント領域に注目して～」</p>

事業 (活動) 内容	<p>1. 先行研究と検証の尺度</p> <p>価値共創の実態を検証するにあたり準拠したのが、Grönroos [3]による「創造の領域」である。彼はプロバイダーと顧客との役割や価値、価値創造の範囲を定義することで、サービスにおける価値共創の概念を明らかにした。ここでの価値とは顧客の使用価値であり、共創は相互作用の機能である。そして価値の創造領域にかかる概念モデルが示された。</p> <p>これによれば、まずサービスの生産されるプロバイダー領域と、顧客が独立して価値創造に取り組む顧客領域とがある。それら 2 つの重なり合う部分が「ジョイント領域」として位置付けられ、ここで価値が共創される。それはサービスやモノの与え手としてのプロバイダーの領域と、受け手としての顧客の領域が重なり合う部分に想定される領域であり、まさに重複がゆえの相互作用が生じている。このモデルを、ここでの検証の尺度とした。</p> <p>2. 研究方法</p> <p>本事業では、ジョイント領域における価値共創の実態を、理美容業を事例に検証することを目的とした。具体的には、KBB の学生に対するアンケートと、その結果を題材にした現場スタッフへのヒアリングである。そして、両調査を相互作用と文脈価値の視点から考察した結果、典型的なサービス業としての理美容業の、価値共創メカニズムの一端が明らかになった。なお、KBB でのアンケートについては、2018 年度の事業報告書において既報しており、本報告ではヒアリング結果についてのみ説明する。</p> <p>ヒアリング先は広島県広島市に本拠を置く『ウイスタリア・フィールド』である。当社は、この 10 年余で業容を大きく拡大した美容サロンで、コンセプトの異なる複数の店舗チャンネルを展開し、充実したコミュニケーションと徹底的な顧客ニーズへの対応で高い評価を得ている。また、同社の代表取締役である藤田善洋氏は、美容業界の働き方改革や高齢者向けのボランティア活動にも熱心に取り組んでおり、この面でも注目される存在である。</p> <p>3. ヒアリングの概要</p> <p>ここでは、このウイスタリア・フィールドの全面的な協力を得て、学生へのアンケートの結果を題材としたヒアリングを実施した。対象は藤田社長のほか、各サロンの店長やブライダル部門・ネイル部門の責任者など同社の上級スタッフ 10 名である。2017 年 8 月～2020 年 3 月の間、夏期ならびに春期休暇に学生を伴って計 6 回、当社を訪問した。いずれも営業の終了した午後 8 時から 2 時間程度のヒアリングである。次項では、学生へのアンケート項目ごとに行ったヒアリングのうち、特に印象的・象徴的なものを取り上げて列挙している。</p> <p>[3] Grönroos, C, Critical Service Logic: Making Sense of Value Creation and Co-Creation Article, <i>Journal of the Academy of Marketing Science</i>, 41(2), pp.133-150, 2013.</p>
------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

効果・結果	<p>1.ヒアリングの結果</p> <p>①共創すべき価値について …… 何を持って価値と捉えるかは人によって様ざまだが、漠然と「価値を提供しているか？」と聞かれれば、大半の回答が肯定的なものになるという見解が大宗を占めた。この点、学生と現場の感覚とに大きな違いは見受けられない。さらに、顧客はその価値を得るために美容サロンへ来るのだから、現場のスタッフ（特にマネージャー格のスタッフ）としては「価値＝金銭」という図式で考えるのが自然ではないかとの意見もあった。ここから、結局は金額化して捉えられるものが価値になるとの指摘もなされている。</p> <p>②顧客にとっての価値について …… 学生の回答で「満足感」が最多であったのも、サービス業なら当然のことという受け止め方であった。一方、当社では全ての顧客に対し、施術前に 30 分間のカウンセリングを必ず行うようにしている。これは顧客ニーズを正しく把握するためのものだが、他愛ない会話から、顧客も自覚していない潜在的ニーズが見つかることも少なくない。ここで把握される顧客ニーズは多岐にわたるため、具体的な言葉として価値を説明するのは難しいとの意見も出された。</p> <p>③価値の生じるタイミングについて …… ヒアリング参加者の間でも意見が分かれることとなった。文脈価値の考え方に拠れば「サービス提供が済んで以降、顧客の日常生活において」が妥当な回答となる。しかし、これは実際のエピソードに基づく質問であり、まだ現場を経験していない学生は、いわば判断材料のない中で回答せざるを得なかった。この点、多くの学生が「価値によってタイミングが異なる」と回答したのも無理からぬものがあるという認識である。</p> <p>④スタイリングの再現性について …… いまや多くの顧客がスタイリストに対して、自宅での洗髪時の注意事項やドライヤーの使い方、トリートメントの選択などについての詳しい説明を求めるのが当たり前になりつつあるという。当社でもこの部分の対応には特に注力しており、実際、顧客が日常生活に戻ってからの「再現性」が重要なキーワードになっている。これは顧客の価値が文脈価値であることを意味するものに他ならず、だとすれば学生の回答ぶりにも不満を感じるという声もあった。</p> <p>⑤顧客のクレームへの対応について …… 現場では、顧客の信頼を維持するためにも、丁寧なクレーム対応は不可欠である。言い換えれば、ここがスタイリストとしての腕の見せ所であり、その善し悪しが次回の指名や予約に直結している。アンケートにおける質問意図は、文脈価値の認識度あるいは認識の可能性を測ることにあった。この点、これら現場のスタッフの意見は、図らずも理美容業の現場に「文脈価値」が浸透していることを示すものだと言えよう。</p>
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2. 考察とインプリケーション

以上のように、学生へのアンケート調査、現場スタッフへのヒアリングとも当初目的に適う結果となった。ここでの発見事実は、第1に、現場経験の有無により学生と現場スタッフとの認識が乖離している点である。学生は、顧客価値についてはある程度イメージできるものの、その価値にサービス提供者である自分がどう関与するかという視点が欠けている。

第2に、学生は相互作用を用語としてだけでなく、感覚的にも理解できないようである。加えて、多くの学生がスキルの提供とサービスの提供とを明確には区別しておらず、顧客関係を単方向のみで捉える傾向が見られた。この点、現場スタッフは日々の仕事において関係の「相互性」を実感しているだけでなく、顧客来店時のカウンセリングも含め、よりの確に価値共創にアプローチしていることが明らかになった。

そして第3には、文脈価値についても学生の理解が中程度にとどまったことである。現場経験を持たない学生は、むしろ顧客の立場からの発想になりがちとも思われたが、実際にはそうではなかった。逆に、現場スタッフの全員が、ヒアリングの席で初めて文脈価値という言葉聞き知ったものの、平素の行動は無意識のうちに文脈価値に即したものである。

以上のような実態は、今後の理美容業における可能性を示唆したものといえよう。現に当社は、ヘアメイクだけでなく、ネイル、アイラッシュ、スパ・育毛、エステ、サプリメント、ファッションといった美容関連サービスを、総合的に提供する新たなビジネスモデルを開始した。しかも、それは顧客のライフステージに準拠したもので、長期・継続的な関係性が前提となっている。これらは顧客の価値を文脈で捉えるからこそそのものであり、これを、ここでのインプリケーションとする。

2019年11月23日～24日、本学「橘祭」でボランティアサロン『晩秋にまどろむ 第二幕』を出展した。来店客19名、当方スタッフ9名。事前の予約時に希望する施術パターンをヒアリングし、事後に満足度を確認する形式とした。写真は左から施術風景、店内風景、施術用具である。

活動記録



2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	教育のまち黒崎推進事業
連携団体名	特定非営利活動法人 北九州未来教育塾 一般社団法人 キャリアサプリア研究会
団体代表者氏名	高木 克昭 櫻井 弘晃
本学教職員氏名	藤野 博行（法学部助教）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>平成30年度は、八幡西区黒崎地域において「安全・安心パーク」の実施や「黒崎マルシェ」の告知ポスター作成などを行ってきた。また、「地域安全マップづくり活動」については、北九州市内（6校）のみならず、福岡市内（1校）においても実施し、テレビや新聞などで取り上げられるなど、一定の成果をあげることができた。「きういカレー」の販売も、黒崎メイト様や遠賀信用金庫様など、地域の企業の協力を得ながら完売することができた。</p> <p>一方、これらの活動を実施するなかで、様々な課題が見えてきた。そこで、令和元年度は、昨年度の活動カリキュラムを改善、深化させながら実施することにより、地域の賑わいづくりと、学生のコンピテンシー・リテラシーのさらなる向上を図ることを事業目的とする。</p>
取組概要	<p>本取り組みは、一般社団法人キャリアサプリア研究会、特定非営利活動法人北九州未来教育塾の協力を受けながら、地域の商店街・企業と連携して様々な活動を展開する。</p> <p>商店街や企業の社会人（街の人たち）と共働して活動することにより、学生の情報収集能力や課題解決能力等のリテラシー及びコンピテンシーを涵養する。これにより、街ぐるみで学生を教育する「教育のまち黒崎」を実現することを目標とする取り組みである。</p>

事業（活動）内容	<p>(1) 「きういカレー」の製造と、地域イベントなどでの販売</p> <p>昨年度、一般社団法人キャリアサプリア研究会、特定非営利活動法人北九州未来教育塾と協力し、「きういカレー」の販売促進イベントを黒崎地域の企業と連携して実施し、好評のうちに完売することができた。今年度も、昨年度と同様に、遠賀信用金庫様等の企業にご協力いただき、地域イベントなどにおいて「きういカレー」の販売を行った。</p> <p>(2) 地域の方々を対象とした安全・安心に関するイベントの実施</p> <p>地域の小学校の子どもたちに対して、「地域安全マップ作成活動」「安全・安心パーク」を実施した。この活動は、環境犯罪学の知見を応用したものである。犯罪が起りやすい場所には共通の特徴があることから、その特徴を子どもたちに知ってもらい、近づかないように心がけてもらうことにより、犯罪に遭わないための力を涵養するものである。このほか、地域の防犯指導者の養成研修である「福岡防犯リーダー養成講座」の指導も担当した。</p> <p>(3) 「黒崎マルシェ」における活動</p> <p>黒崎カムズ商店街は国家戦略特区（国家戦略道路占用事業）の認定を受けており、毎月第3火曜日に、地域の方々が自ら作成した雑貨や食品などを販売するイベントである「黒崎マルシェ」を開催している。</p> <p>地域課題研究（大学コンソーシアム関門提供科目）において、黒崎マルシェを盛り上げるためのイベント「段ボール迷路で遊ぼう」を企画、実施した。</p>
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(1) 「きういカレー」の製造と、地域イベントなどでの販売

今年度は、キウイカレーを 2000 食製造し、地域のイベントや企業主催のイベントなどにおいて販売した。

カレーは 2019 年 10 月に完成し、以来 3 ヶ月で約 1200 食を販売したものの、2020 年初めより国内で蔓延し始めた新型コロナウイルス感染症のため、それ以降は満足な販売活動ができなかった。以下のイベントでカレーを販売した。

- ① 11 月 1 日：学内販売開始。
- ② 11 月 7 日：しんきん合同商談会（マリンメッセ福岡）にてカレー展示。
- ③ 11 月 9 日：こども食堂（NPO 法人わくわーく）にてカレー提供。
- ④ 11 月 17 日：おんしん講演会（宗像ユリックス）にてカレー販売。
- ⑤ 11 月 23 日・24 日：大学祭においてカレー販売。

(2) 地域の方々を対象とした安全・安心に関するイベントの実施

今年度は、市内外 6 校の小学校のほか、韓国釜山の青龍初等学校（日本の小学校にあたる教育機関）において地域安全マップ作成活動を実施した。また、黒崎子ども商店街での「安全安心パーク」では、100 人以上の小学生が、学生の考案した安全・安心ゲームを体験した。このほか、県内の防犯に関する多くの研修会の指導も担当した。主な活動履歴は以下の通りである。

- ① 5 月 7 日：『北九州市学生防犯ボランティア連絡会議』及び『防犯アカデミー』参加
- ② 6 月 21 日：北九州市「筒井小学校」地域安全マップ活動実施
- ③ 6 月 25 日：北九州市「一枝小学校」地域安全マップ活動実施
- ④ 9 月 6 日：北九州市「小石小学校」地域安全マップ活動実施
- ⑤ 9 月 27 日：北九州市「八幡小学校」地域安全マップ活動実施
- ⑥ 11 月 1 日：遠賀町「広渡小学校」地域安全マップ活動実施
- ⑦ 11 月 9 日：黒崎子ども商店街イベント参加（安全安心パーク実施）
- ⑧ 11 月 17 日：福岡県生活安全課主催「福岡防犯リーダー養成講座」実施
- ⑨ 2 月 7 日：福岡市「香椎小学校」地域安全マップ活動実施
- ⑩ 2 月 14 日：北九州市主催「安全安心学生ボランティア連絡会議」報告
- ⑪ 2 月 19 日：韓国釜山「青龍初等学校」地域安全マップ活動実施
- ⑫ 2 月 19 日：韓国釜山金井警察署との「地域防犯意見交換会」参加

(3) 「黒崎マルシェ」における活動

黒崎カムズ商店街組合に協力いただき、黒崎マルシェを盛り上げるためのイベント「段ボール迷路で遊ぼう」を企画・実施した。

企画に際しては、事前に取得しなければならない道路専用許可・使用許可の申請などを学生が行い、当日の迷路の設計、迷路以外の遊具の作成などを行った。また、イベント当日は気温が高くなる可能性があるため、来場する子供の健康管理やオペレーションの立案も学生が行い実施した。参加した学生は、商店街組合の方に指導を仰ぎながら活動に取り組んでいた。なお、本イベントは高大教育連携校である八幡南高等学校の生徒も参加した。

(1) 「きういカレー」の製造と、地域イベントなどでの販売



おんしん講演会におけるカレー販売

(2) 地域の方々を対象とした安全・安心に関するイベントの実施



防犯リーダー養成講座（大牟田市）



地域安全マップ活動（香椎小学校）

(3) 「黒崎マルシェ」における活動



完成した迷路



イベント中の様子

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	小倉祇園観光案内ボランティア
連携団体名	Yahata Backyard Student Supporters
団体代表者氏名	福西 和幸
本学教職員氏名	福西 和幸（現代ビジネス学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	北九州市を訪問する外国人観光客が急増し、市内で行われるイベントや交流事業などで多言語による対応が求められている。昨年度より、八幡東区総務企画課による「河内藤園観光コンシェルジェ」へ本学の、特に海外留学を経験した学生ボランティアが参加したことをきっかけに、「小倉祇園太鼓」「北九州市学生国際交流事業」「東京ガールズコレクション」などへの多言語案内ボランティアへの参加依頼が寄せられるようになった。これらに多くの学生が参加の意思を示したことから、Yahata Backyard Student Supporters を組織し、こうしたボランティア活動に参加しやすい環境を整えるために本事業がスタートした。
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八幡東区総務企画課「観光コンシェルジェ」への参加 ・ 小倉祇園太鼓事務局「多言語対応ガイド」への参加 ・ 西日本シティ銀行、北九州市「オランダ大学生訪日研修」への参加 ・ 北九州市「東京ガールズコレクション案内ブース」への参加 ・ 八幡東区総務企画課「八幡駅付近多言語案内パンフレット」制作

事業（活動）内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八幡東区総務企画課「観光コンシェルジェ」 ゴールデンウィーク期間中、海外留学を経験した学生（30名）を中心に、河内藤園を訪れる外国人観光客向けに八幡駅および河内藤園にて「多言語対応観光コンシェルジェ」に参加した。 ・ 小倉祇園太鼓「多言語対応案内ボランティア」 400周年を迎えた小倉祇園太鼓イベントにも多くの外国人観光客が訪れており、その対応へのボランティア参加打診が同事務局からあり、20名の学生が興味を示し参加した。 ・ 西日本シティ銀行、北九州市「オランダ大学生訪日研修」 北九州市・北九州観光コンベンション協会から、西日本シティ銀行が実施しているアムステルダム応用科学大学の訪日研修イベントへの協力依頼があった。英語が特に堪能な学生4人を派遣し、交流イベントの参加、運営に協力した。 ・ 「東京ガールズコレクション」北九州市観光案内支援 10月に西日本総合展示場で開催された東京ガールズコレクションでの北九州市観光案内ブースの運営支援の依頼があり、留学から帰国したばかりの2名の学生が英語による案内にあたった。 ・ 八幡東区総務企画課「八幡駅付近多言語案内パンフレット」共同制作 英語・中国語・ベトナム語による、八幡駅付近の案内パンフレット制作が企画され、本学学生が編集の任にあたり推進される予定であった。残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大のため、企画は中断された。
効果・結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外留学を経験した学生が自ら得たコミュニケーション能力を実践することができた。 ・ 地域と国際性という視点を学生に掲示することができ、また本学の国際教育戦略の方向性を示すことができた。 ・ 特に北九州市役所との連携は、公務員などを志向する学生にとって、今後の本学での実践的な学びの展開に強い動機付けとなったと考えられる。

活動記録	<ul style="list-style-type: none">・八幡東区総務企画課「観光コンシェルジェ」 2019年4月25日～5月6日 ・小倉祇園太鼓「多言語対応案内ボランティア」 2019年7月19日～7月21日 ・西日本シティ銀行、北九州市「オランダ大学生訪日研修」 2019年7月16日 ・「東京ガールズコレクション」北九州市観光案内支援 2019年10月7日 「八幡駅付近多言語案内パンフレット」共同制作 2019年11月～ 学生着用Tシャツ制作 2019年11月
------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	JFA なでしこひろば in 九州国際大学 ～スポーツで地域交流～ グラウンド・ゴルフ
連携団体名	JICA 九州国際センター NPO 法人北九州フットボールクラブ
団体代表者氏名	植村 吏香 岡村 武之
本学教職員氏名	木下 温子（現代ビジネス学部助教）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>スポーツマネジメントコース（旧ビジネスアスリートコース）では、2014年11月より「サッカー教室」を月に1回開催している。これは本学女子サッカー部の創設に伴い、女子・女性がサッカーをする環境を地域に提供することを目的に、（公財）日本サッカー協会（以下JFA）の承認を得て、「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」として活動している。北九州には女子サッカーチームは3チームのみであり、人数不足で活動も十分にできない状態あり、環境提供は大きな役割となっている。</p> <p>サッカー教室は2年次が担当するが、1年次にJFA公認「キッズリーダー」の資格を取得した上で、資格を生かしコーチとして活動している。</p> <p>JICA九州との連携は、スポーツ普及活動なども世界で行っている機関が大学の横にあるということを知るために施設訪問を行なったことがきっかけである。その後、来日中のJICA研修員に参加を呼びかけ、2017年2月に「サッカー交流大会」を開催した。その後は、開催毎にJICA研究員に対しても英語のポスターを施設に貼付し参加を募っている。</p> <p>2016年度より「グラウンド・ゴルフ」を月1回開催している。これは、学内の施設の有効利用ができ、地域の幅広い年齢層とスポーツで交流するための種目を選定した結果である。八幡東区の高齢者が占める割合が多いこと、近隣の公園でグラウンド・ゴルフを楽しんでいる団体が多く見かけたこと、学内に用具が1式揃っていることにより始まった。当初、旧平野中学校跡地である多目的グラウンドを使用する予定であったが、グラウンドコンディションが悪く適していなかったため、現在は、平日の日中で空時間の人工芝で行っている。この活動をきっかけに、NPO法人北九州フットボールクラブが「グラウンド・ゴルフ事業」を展開することになり、連携団体として、学生スタッフの派遣や道具貸出に協力している。</p>

取組概要	<p>「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」</p> <ul style="list-style-type: none">・ JFA 公認「キッズリーダー」養成講習会（一般へオープン）・ 月 1 回のサッカー教室の企画・運営（季節のイベント含む）・ 指導案の作成、開催日時の決定・ ポスター・チラシの作成、配布、貼付、SNS 発信など広報活動・ JICA 研修員参加募集（英語でのポスター作成、貼付）・ 年 1 回フェスティバル（次年度への引継ぎを兼ねて） （JFA レディース／ガールズサッカーフェスティバル）・ 満足度調査 <p>～スポーツで地域交流～「グラウンド・ゴルフ」</p> <ul style="list-style-type: none">・ 月 1 回のグラウンド・ゴルフの企画・運営・ 年 2 回のグラウンド・ゴルフ大会の企画・運営・協力 （NPO 法人北九州フットボールクラブとの連携事業）・ ポスター・チラシの作成、配布、貼付、SNS 発信・ 満足度調査
------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

事業 (活動) 内容	<p>「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」</p> <p>5/26 (日) 7名「女子高校生チーム・創部記念として招待」</p> <p>6/29 (土) 雨天中止</p> <p>7/20 (土) 雨天中止</p> <p>8～9月*熱中症予防対策、大学夏休みのため日程調整不可</p> <p>10/20 (日) 6名「ハロウィン企画」</p> <p>11/23 (土) *学園祭(キックターゲットなど付帯イベントのみ) サッカー(大学・付属)大会・リーグにより日程調整不可</p> <p>12/1 (日) 11名「クリスマス企画」</p> <p>1/25 (土) 福岡県サッカー協会キッズ委員会フェスティバルへスタッフ派遣</p> <p>3/1 (日)(新型コロナウイルス感染拡大予防のため、中止)</p> <p>全3回開催、3回中止 延 24名</p> <p>～スポーツで地域交流～「グラウンド・ゴルフ」</p> <p>5/22 (水) 10名「学生50名も一緒に参加」</p> <p>6/26 (水) 17名</p> <p>7/24 (水) 9名「すいか企画」</p> <p>8～9月*熱中症予防対策、大学夏休みのため日程調整不可</p> <p>10/30 (水) 5名</p> <p>11/18 (月) NPO 法人北九州フットボールクラブの大会スタッフ協力</p> <p>11/27 (水) 8名</p> <p>12/11 (水) 8名</p> <p>1/22 (水) 8名「ぜんざい企画」</p> <p>全8回実施、延 65名</p>
------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

効果・結果	<p>月 1 回開催し次回はより良い活動になるよう、PDCA サイクルに基づき改善を繰り返している。「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」においては、改善点として土曜日の小学校の授業日と重ならないこと、年間での開催日時提示することで調整したが、天候による中止、大学の夏休みが 9 月末まで及んだこと、大会・リーグなど行事により開催日程を組めなかったことなどにより、実際に開催できたのはわずか 3 回であった。また、3 月には大規模イベント（フェスティバル）開催を準備していたが、新型コロナウイルス感染拡大予防対策として、開催 1 週間前に「中止」の判断をすることになった。JICA 研修員の参加に関しては、研修員自体の来日の人数が減少している上、滞在期間が短くなっていることもあり、参加の機会を提供することができなかった。開催日程調整が難しい 1 年となった。一方、内容としては、今年度の学生スタッフには野球部も多くいたため、手で投げるといった動きを入れるなど、子どもたちに対して、多くの動きを様々な体の部位を使って経験してもらうことができた。発育発達期にふさわしい動きづくりのレパートリーを増やすことが成果といえる。</p> <p>「グラウンド・ゴルフ」においては、改善点として曜日時間を固定して開催することとし、「木曜 9:30～」で調整していた。しかし、今年度は授業の時間割の関係で「水曜日 10:30～」と変更する必要があった。結果的には、従来の参加者は他の活動と重複するため参加できないということで、参加者の減少に至った。時間割が活動にかなり影響しているため、今後検討していく必要がある。また、昨年度までは「ゼミ活動」としており、学生のコミュニケーション、連帯感がある中で運営スタッフとして活動できていたが、今年度から「イベントプランニング」の履修生が運営スタッフとして携わることとなった。事前の授業で役割分担、打ち合わせ、様々な準備をした上で当日を迎えるが、「企画・運営」の自覚がなく、一部の学生にしわ寄せが出ることもあった。一方、参加者の中には学校に行くことが難しいが、グラウンド・ゴルフは毎月楽しみで待ち遠しいという方もおられた。保護者の方と話をし、慣れるまでは毎回同じ学生スタッフが対応することとし、信頼関係を作り安心して参加してもらうことにした。参加者の人数は減少したが減少した結果、参加者に細やかな対応ができた。一人でも多くの方に満足して参加してもらえたことが、今年度の成果といえる。</p>
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



手つなぎ鬼ごっこで、動きづくり



好評の「クリスマス企画！」

活動記録



「この距離だけど、みんなから注目されると、緊張する！！」

2019（令和元）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	学生および地域の子どもたちのシビックプライド醸成・地域活動参加促進事業
連携団体名	中央町連絡協議会・結（YUI）
団体代表者氏名	坂本 洋二
本学教職員氏名	栗畑 恭介（現代ビジネス学部助教）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>本年度の取り組みのいくつかは、前年度から中央町での地域活動に参加してきた学生の発案によりスタートした。子どもを対象にした活動は、親、祖父母といった地域の多世代、多様な人々を巻き込むことができ、その子どもと地域の大人の間で立てるのが自分たち学生世代であるとの認識のもと、持ち上がった企画である。</p> <p>九州国際大学の学生は、これまでも八幡東区中央町で行われる様々なイベントに参加しており、学生らしい自由な発想や活力が求められてきた。一方で、様々な地域から進学してくる学生にとって、地域への思い入れは必ずしも大きいわけではない。また卒入学によって常にメンバーが入れかわるため、地域活動への意欲を高めるためにも地域に対する親しみや思い入れを形成するところから取り組む必要がある。本事業は、そうした学生の地域への意識付けや継承も目的としている。</p>
取組概要	<p>中央町連絡協議会・結で学生企画を検討し、八幡小学校放課後児童クラブや八幡大谷まちづくり協議会の協力の下、中央町および中央区商店街で行われる既存イベントとも組み合わせながら、以下の活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■中央区商店街での既存イベントへの協力 ■「こどもサタデー笑店街」への企画参加 ■サツマイモ栽培とその利用イベントの企画実施 ■学生による地域住民との交流イベントの企画実施 <ul style="list-style-type: none"> ・中央区商店街アーケード横でのバーベキュー大会の実施 ・サツマイモ調理会および地域への振る舞い実施 ■八幡空襲に関する教育資料の作成と教育イベントの実施

事業 (活動) 内容	<p>■バーベキュー交流会実施（５月）</p> <p>昨年続き、本年度の活動の開始にあたり、中央区商店街アーケード広場横にて、地域の方々と学生との交流会を実施した。なお、その準備・案内は新たに地域づくりコースに配属された学生たちが担当した。</p> <p>■既存イベントへの協力（通年）</p> <p>中央区商店街アーケード広場で行われる「黒崎よさこい祭り（中央町会場）」など賑わいづくり事業に協力するとともに、中央町連絡協議会・結（YUI）の月例会など各事業の企画会議に参加し、協働意識を高めた。</p> <p>■中央区商店街子どもサタデー笑店街（５月、９月開催分）</p> <p>本年度から中央区商店街で始まった、子どもたちの商売体験やものづくりなどを核に様々な主体が参加するイベントであるが、企画会議への参加や運営スタッフとして学生が活躍した。ただ、学生の子どもたちを対象にした企画との共通性から企画準備を行っていた年度末の開催分については、新型コロナウイルスの影響により、実施には至らなかった。</p> <p>■ふれあい菜園に関連するイベントの実施（通年）</p> <p>地域づくりコース乗畑ゼミでは、土地とつながり年間を通して活動する農業は、子どもたちのシビックプライドの醸成に最適であると、学生が九国大菜園を企画し活動場所を探っていたところ、八幡大谷まちづくり協議会が使われなくなったテニスコートをふれあい菜園にし、本年度から活動するとのことで、その活用計画を学生が行うこととなった。また準備段階も含め、その過程で様々な交流が生まれた。</p> <p>イベントとしては、八幡小学校放課後児童クラブの協力により、芋植え会（６月）、収穫祭（１１月）を行ったほか、子どもたちとの調理会（１２月）や地域の伝統行事である「どんど焼き」と合わせて芋ぜんざい等の振る舞い会（１月）を行った。</p> <p>■戦災教育（８月）</p> <p>昨年、八幡空襲の体験者からお話を聞いた学生から、子どもたちへ伝えるお手伝いをしたいとの企画が持ち上がり、八幡空襲のあった８月８日あわせて八幡小学校放課後児童クラブにて地域の戦災を学ぶ会を実施した。</p> <p>聞き取りにおいて、児童クラブの先生、体験者の方双方から、特に低学年の子供たちへの伝え方の難しさについて言及があり、飽きさせずわかりやすく伝えかつ地域の出来事として当事者意識をもてるよう、動画やレクリエーションも取り入れるなど随所に学生ならではの工夫を凝らしたものとなった。</p>
------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

効果・結果	<p>本事業を通して、学生の地域への愛着や活動への意欲が高めることができた。加えて、学生が地域の方々の間に入ることにより、地域の多世代、多様な人々をより効果的に結びつけることができたと考えている。</p> <p>例えば、菜園事業においては、交流等を目的にしたイベント時に留まらず、その整備過程においても、学生の参加が地域の結びつきを強める一助になったと思われる。土壌改良のため大量の堆肥の搬入を行ったが、学生の人力作業を見兼ね（株）ビケンテクノ様、丸八商事（株）様から重機でのお力添えを賜った。また作業中には多くの地域の方々からお声かけ頂き、地域をつなぐ効果を実感するとともに、地域の一員として学生自身の意識を高める効果もあった。</p> <p>また、震災教育イベントにおいては、大学生が動画を用いたり子どもたちと掛け合いを行ったりしながら進めることで、長時間にもかかわらず集中している様子だった。当日は体験者の方が同席くださり、わかりやすさに加え地域の出来事として実感を伴ったものとなった。震災体験者や児童クラブの先生方からは、特に小さな子どもたちにとって大学生が間に立つことにより、直接のお話以上に伝わっていたのではないかとの評価を頂いた。</p> <p>限られた期間の関わりとならざるを得ない大学生という立場を考えたとき、主役を地域の方々におき、大学生がつなぐ役割を担った本事業の活動は、学生、地域双方にとって望ましい形の一つであろうと考えている。</p>
-------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

商店街での交流会およびイベントへの学生参加の様子



企業様にもご協力いただいた菜園の土壌改良作業の様子



活動
記録

ふれあい菜園イベントの様子



戦災教育イベントの様子



令和 2 年度

地域連携推進事業活動報告書

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

- 「黒崎商店街のサステナビリティ・デザインに関する産官学協働事業」…… 31
法学部准教授 花松 泰倫
- 「八幡におけるアートを通じた地域連携推進と
新たな地域活性化に向けた取り組み」…………… 37
現代ビジネス学部教授 三輪 仁
- 「金融サービスを通じた価値共創に関する共同研究」…………… 41
現代ビジネス学部教授 村上 真理
- 「教育のまち黒崎推進事業」…………… 45
法学部助教 藤野 博行
- 「～スポーツで地域交流～」…………… 49
現代ビジネス学部助教 木下 温子
- 「防犯・防災教育及び地域安全マップ活動活性化事業」…………… 53
法学部教授 姜 信一
- 「学生の意欲の向上および地域住民間交流の促進事業」…………… 57
現代ビジネス学部助教 桒畑 恭介

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	黒崎商店街のサステナビリティ・デザインに関する産官学協働事業
連携団体名	黒崎商店街連合会および熊手銀天街組合 北九州市産業経済局商業・サービス産業政策課
団体代表者氏名	田中大士 新貝英生（当時）
本学教職員氏名	花松泰倫（法学部准教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>黒崎地区の中心でありシンボルでもある黒崎商店街は近年その衰退が顕著であり、通行量の減少や空き店舗数の増加などに強い懸念が示されている。しかし、黒崎商店街の未来図を誰がどのように描き、実現していくのか、商店街を黒崎地区にとってどのような空間として位置づけていくのかについて、ステークホルダーの間で共有されるイメージや具体的計画が存在しているとは言えない。そこで本学の教員学生、黒崎商店街連合会、北九州市役所の連携によって、黒崎商店街の持続性ある未来イメージを構築するサステナビリティ・デザイン、およびそのための予備的調査やイベント企画実施による商店街活性化を目指した産官学協働事業を試みるに至った。</p>

取組概要	<p>本地域連携事業は、①黒崎商店街連合会を中心とした地域組織とその構成事業者、行政サービスの観点から商店街を支える北九州市役所とともに行う産官学の協働事業により、持続可能な黒崎商店街の未来を商店街関係者とともにデザインし創出する基盤を構築する②そのための予備的調査や合意形成プロセスの実施をゼミや実習という形で本学法学部学生自身が担うことで、学生の地域社会に対する感受性と責任感、リーダーシップ力を育て、人口減少時代に対応できる人材を育成することを目的とする。その上で、(1)黒崎商店街の運営サイドの課題に関するインタビュー・ヒアリング調査、(2)消費者の視点から見た黒崎商店街の利用実態に関するアンケート調査、(3)「黒崎こども商店街」イベントへの運営・企画、の3つの事業を行う計画であった。</p> <p>しかし、昨年3月から急速に拡大した新型コロナウイルスの蔓延に伴い、春学期期間すべてを通して本学学生による学外実習活動すべてが禁止されたこと、「黒崎こども商店街」が中止となったことを受け、大幅な変更を余儀なくされた。その結果、「リスクマネジメント実習」科目を通して、①「黒崎シャッターアート」事業への参加、②黒崎中央小学校との協働による「黒崎手形アート」事業、③SNSによる「黒崎隠れ名店紹介」事業の3つを行うに至った。</p>
------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

事業 (活動) 内容	<p>①「黒崎シャッターアート」事業への参加</p> <p>井筒屋・黒崎メイトの撤退に伴って商店街に店舗を構えるテナントが増えているものの、黒崎商店街は依然としてシャッターを下ろす店舗も多く、「シャッター街」と表現されて久しい。そうした中、昨年度、副都心黒崎推進会議のなかで構成される黒崎活性化委員会の企画として、「来たくなる黒崎」を創造すべく、シャッターに絵を描くプロジェクトが持ち上がった。福岡を拠点に世界的に活躍するアーティストである Colorrhythm Risa(カラリズムリサ)氏が黒崎に関連した図案を作成し、熊手銀天街の旧ながしまフードセンターに残されたシャッターに商店街関係者や周辺住民で絵画を描くプロジェクトとなった。11月には法学部リスクマネジメント科目「リスクマネジメント実習」の履修学生20名が、関係者や近隣住民とともにシャッターの清掃、下絵の作成などのサポートを行った。シュガーロード(長崎街道)をモチーフにしたシャッター絵画は昨年12月に完成した。</p> <p>②黒崎中央小学校との協働による「黒崎手形アート」事業の実施</p> <p>コロナ禍の影響によって客足が遠のき、厳しい状況が続いていた黒崎商店街を元気づけようと、「リスクマネジメント実習」の履修学生によって企画された事業である。前述の黒崎シャッターアートと共通する部分もあるが、大学生のみならず黒崎商店街になじみのある近隣の子供たち(主に小学生)とともにカラフルなアートによって商店街を明るくすることを目的として企画された。備品の使い回しや作業時の密状態を回避し、接触によるコロナ感染を防ぐために、小学生児童による手形アートという形で履修学生が黒崎中央小学校へ企画を持ち込み、また熊手銀天街組合会長よりアーケードでの展示許可を頂くことで実現した。校内での感染防止や備品の受け渡し等で困難もあったが、小学校および熊手銀天街の手厚い協力を得て完成し、2021年1月より熊手銀天街にて展示されている。</p> <p>③SNSによる「黒崎隠れ名店紹介」事業</p> <p>コロナ禍の影響で現地実習が十分な形で行えない中で、密回避による客足の減少で困窮する黒崎商店街の活気を取り戻すことを目的に、法学部「リスクマネジメント実習」の履修学生が企画した事業である。黒崎にある隠れた飲食店やカフェなどの名店を学生自ら発掘して交渉し、少人数でインタビューと動画撮影を行った上で、InstagramやTikTokといったSNSメディアを利用して10店舗ほどの情報を発信する事業を行った。また、前述の黒崎シャッターアート事業で懇意となったJR黒崎駅所長の好意により、JR黒崎管内(折尾駅～九州工大前駅)にSNS宣伝ポスターを掲示した。その結果、福岡市内や九州の他地域から多くの方々に見て頂き、フォロワーも着実に増加するなど、好評を得ている。さらに、黒崎の飲食店に関するまとまった形でのSNS</p>
------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>発信はこれまでになかったことから、商店街関係者でも注目されている。</p>
効果・結果	<p>以上の活動により、以下の効果、結果および見通しが得られた。</p> <p>① 「黒崎シャッターアート」事業への参加を通して、本学学生が黒崎商店街イベントに参加することで商店街関係者や周辺住民とともに協働作業を行うきっかけを掴むことができた。黒崎商店街および北九州市との協議を踏まえ、本年度はさらに北九州市の黒崎活性化関連事業として、複数のシャッターアート企画を行うことになっている。</p> <p>② 「黒崎手形アート」事業の実施を通して、商店街および近隣小学校との連携サポートのきっかけを作ることができた。商店街側、近隣小学校の双方が何らかの形で互いのコラボレーションを望んでいる一方で、企画立案や人的資源の確保に二の足を踏んでおり、本学学生が実習活動の一環としてその触媒の機能を果たすことが可能であることが実証されたと言える。地域の発展には「学校」の存在が欠かせないことから、産学官連携事業として今後の発展可能性についての一つの指針、方向性が得られた。</p> <p>③ 「SNS 隠れ名店紹介」事業は、当初、コロナ禍において大人数の学外実習活動が行えない中で学生自身が考えた苦肉の策であった。しかし、「次善の策」とは思えないほどの履修学生による尽力と完成度の高さに加え、集客に苦しむ店舗側と安全な形で飲食を楽しみたい一般消費者の双方のニーズに応える形で注目を集め、大きな成果を得た。アフターコロナにおける黒崎商店街の情報発信を今後発展させていく上、大きな足がかりとなる手応えを得た。</p> <p>以上の結果より、本学学生の教育効果を内在化させた産官学協働事業をコロナ禍に合わせて遂行したことで、今後の連携事業の発展が大いに期待される。</p>
活動記録	<p>【活動に関する URL】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法学部 TV チャンネル <p>【リスクマネジメントコース】黒崎シャッターアートプロジェクト</p> <p>https://www.youtube.com/watch?v=HXffX3_uDpg</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「クロサキの知らない世界～大学生が厳選する隠れ名店～」 <p>Instagram: https://www.instagram.com/kiu_kurosaki/</p> <p>TikTok: vt.tiktok.com/ZSnQV3RV</p>

【活動写真】



黒崎中央小での手形アート作り



熊手銀天街の手形アート展示



黒崎シャッターアートの下絵作り



完成した黒崎シャッターアート

活動記録



JR 各駅に掲示された宣伝ポスター



Instagram での名店紹介

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	八幡におけるアートを通じた地域連携推進と新たな地域活性化に向けた取り組み
団体名	① KEYAKI TERRACE YAHATA、②やはたアートフォレスト実行委員会
団体代表者氏名	①井上龍子 ②伊藤 須美子
本学教職員氏名	三輪 仁（現代ビジネス学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>申請者はこれまで5期に渡り本助成を受け、連携先団体と協働して10月の平野文化祭や11月のYotteco Yahata、本学橘祭などの地域イベントにおいて、学生が地域の様々な企業・団体・行政機関等と連携し、その企画や運営に携わる機会を得ることができた。これは学生の本学の地域貢献という観点からも意義があったと考える。</p> <p>2019年度より新たな取り組みとして、八幡東区の様々な団体・企業・機関が連携して取り組む八幡の秋のアートイベントである「やはたアートフォレスト」に参加がある。同年においては、西日本工業大学・水野研究室とのコラボレーション活動を行い、やはたアートフォレスト2019及び本学橘祭の企画出展として立体おりがみワークショップ、2020年2月にはまち歩きイベント「YAHATA FUN WALK」を共同実施した。</p> <p>2020年度の活動においては、やはたアートフォレストの認知度向上と参加団体間の連携深化に重点を置く予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い地域活動が大幅に自粛や中止となったこともあり、本申請に伴う活動についても、大幅な内容の変更を余儀なくされた。</p> <p>そこで、新しい生活様式やリモート化の進展に対応した八幡地区の地域活性化やにぎわいづくりについて、連携先団体と協働を進めて、模索を行った1年となった。</p> <p>そうしたなかで、本年度は現代ビジネス学部地域経済学科における地域づくりコース1期生が4年に進級し、卒業研究の作成年次となったことから、卒業研究の制作を進めたり、その発表の機会を設けていただくなど、本地域連携を活用させていただいた。</p>

取組概要	<p>◎本年は2つの連携先団体に対し、以下に挙げる各活動を展開した。</p> <p>◆八幡駅前開発株式会社</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き継いで、八幡夢みらい協議会、西日本工業大学デザイン学部水野研究室が連携した地域交流イベント実施 ・KEYAKI TERRACE YAHATA 関連 <ul style="list-style-type: none"> 八幡駅前地区の歩道利用イベント、八幡地区イルミネーション点灯 ・やはたアートフォレスト <ul style="list-style-type: none"> 本年度においては、秋に計画されていたアートイベントが中止に、東アジア文化都市事業が2021年度に順延となった そうしたなか、4年生が卒業研究として地域と連携したホラームービーの制作を進めた。2021年度のアートフォレストへの参加作品として中央区商店街などに協力を得て撮影を進めた。 <p>※平野市民センターについては新型コロナ感染拡大の影響により年間に渡って活動が自粛されたため、本年度は目立った連携活動を行えなかった。</p>
事業（活動）内容	<ul style="list-style-type: none"> ・5月 西日本工業大学デザイン学部水野研究室との協働活動報告書『YAHATA WORK SHOPS2019』刊行（八幡夢みらい協議会、KEYAKI TERRACE YAHATA） ・10月11日 けやきマルシェ（八幡駅前通り） <ul style="list-style-type: none"> 皿倉健康ウォーク開催に合わせた八幡駅前地区での出店 ・7月～3月 八幡地区の地域連携型のホラームービーの制作 ・11月14日～1月17日 イルミネーション 九州国際大学中庭の崖部分 <ul style="list-style-type: none"> 八幡駅前地区へのイルミ設置 ・11月22日 九州国際大学橘祭での地域連携お化け屋敷企画 ・11月29日 やはたまちづくり応援講座（レディスやはた） <ul style="list-style-type: none"> 学生による活動報告
効果・結果	<p>前述の通りに本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大にともない、当初予定されていた地域活動や地域イベントの大半が中止や規模縮小を余儀なくされた。特に平野市民センターに関しては毎年行われる平野文化祭も中止となり、連携活動が行えなかった。</p> <p>そうしたなかで、やはたアートフォレストに関しては、4年生の卒業研究という形で八幡地区の商店街やスポットを舞台としたホラームービー制作に取り組むことになった。撮影に際しては、大学の協力を得て1号館にセットを設置し、橘祭においてはロケセットを活用する形で感染症対策に配慮したお化け屋敷企画の出展を行った。</p> <p>地域活動には制限も多く、行えなかった活動が多かったが、その一方でこのような状況下においても、実現可能な取り組みを模索し、次年度以降につなげていく意味では意義のあった1年ではないかと捉える。</p>

5月「YAHATA WORKSHOPS 活動報告書」

YAHATA WORKSHOPS 2019-20

歴史と未来を繋げる
八幡ワークショップ 2019-20

KYAKKI TERRACE YAHATA
九州国際大学 三善 紀子
島田 正太郎 加藤 純規



九国大コース
八幡の文化と歴史を体感する

① 長崎街道
② 福岡県職工争業工業組合八幡支部

九国大ルート

15

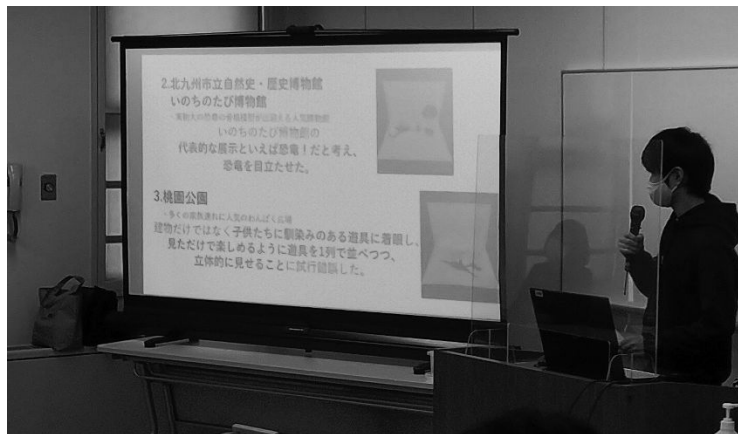
16

活
動
記
録



11月 八幡駅前でのイルミネーション取り付け作業
(九州電力、八幡駅前開発との協働)



11月29日やはたまちづくり応援講座 (レディスやはた)



2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	金融サービスを通じた価値共創に関する共同研究
連携団体名	福岡ひびき信用金庫
団体代表者氏名	小茅智弘氏（地域創生室 室長）
本学教職員氏名	村上真理（現代ビジネス学部 教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>令和2年1月、本学と福岡ひびき信用金庫（以下、ひび信）とで包括的地域連携協定が締結された。これは共に地域の課題解決に取り組む中、さまざまな分野で連携・協力していくことを目的としたものである。これを受け、事業担当者が受け持つ「マーケティング論」「マーケティング論入門」では、マーケティングの最新分野である価値共創研究について、金融サービスをモデルに検証することとなった。また、協定の主旨を踏まえれば、座学のみならず、地域をフィールドとした幅広い対応が望ましい。そこで講義でのアンケート調査を起点とした深度ある共同研究をフレームワークにし、以て地域金融機関における金融サービスが、顧客価値の創造にどのように寄与しているかの一端を明らかにした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">▲締結式の様子。福岡ひびき信用金庫 野村会長と西川学長</p>
取組概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和2年度講義における実施事項 <ol style="list-style-type: none"> ①「マーケティング論」「マーケティング論入門」の受講生を対象にした金融サービスに関するアンケート調査の実施、ならびに集計・分析 ②アンケート結果を踏まえてのレポートの作成 ③レポートに基づく中間報告会 2. 講義用サブテキストの作成 <ol style="list-style-type: none"> ①学生代表による共同作業（講義履修生のうち希望する5名程度） ②ひび信との内容検討会 ③次年度の講義での座談会実施に関する協議 3. 学会報告 <ol style="list-style-type: none"> ①協働金融研究会への状況報告 ② 〃 次年度全国研修会での事例発表にかかる事前調整

1. 中間報告会

令和2年11月14日、学内AL教室で、新たな金融サービスにかかる共同研究の中間報告会を開催した。これは包括的地域連携協定に基づく事業の一環であり、ひび信の地域創生室と本学村上ゼミが進めている協同研究の進捗状況とここまでの成果を発表したものである。出席者は、ひび信が野村会長以下5名、本学が西川学長・山口副学長ほか11名で、さらにニッキン（日本金融通信社）の記者も同席した。

冒頭、西川学長より共同研究の意義があらためて説明され、中間段階までできたことへの労いがあった。ここでの報告テーマは『金融機関における顧客価値の創造 ～サービスと関係性の視点から～』で、報告は地域経済学科の学生、古賀咲智さん・古野智也くん・長廣海斗くんの3名が務めている。閉会時には、ひび信の野村会長から、地域金融の将来方向を踏まえると地域におけるフェイス・トゥ・フェイスの関係性は極めて重要であり、そこに本研究の意義もあるとの評価が示された。

なお、報告会の席上、事業担当者から、年度内には授業のサブテキストとしての報告書を編綴すること、ならびに今後の活用イメージが説明され、出席者一同で共有化している。



▲学生による報告（左）と、コメントするひび信の野村会長（右）

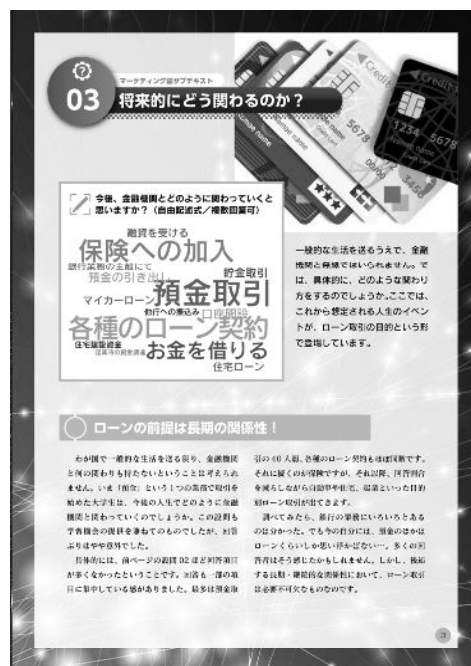
2. 報告書（講義用サブテキスト）

わが国のマーケティング研究は、その多くをマーケティング発祥の地である米国に学んできた。しかし近年では、米国のものとは明確に異なるマーケティング理論およびサービス研究に注目が集まっている。そこではサービスをプロセスとして捉え、顧客との関係性や顧客価値の創造がこれまで以上に重視されるのだが、いまだ理論研究の域を出ないとの指摘も多い。結果として納得感を伴う事例研究が不足しているのも事実である。共同研究の初年度の活動で「新たなサービスのあり方」に注目したのは、以上の背景認識によるものであった。さらに、講義用テキストとはいえ、研究成果として実務におけるインプリケーションを明確化しているが、これは、ひび信の小茅智弘地域創生室長ほかスタッフん皆さんの全面的なご支援の賜物である。

アンケートは、2020年度春学期、「マーケティング論」「マーケティング論入門」の履修者約150名を対象に行った。3度に分けて金融・サービス・関係性の各分野について尋ねたが、特に、サービスや金融取引の詳細については、学生に十分な想像力が働かないと思われたので、ここではアンケートに回答することが1つの学習機会になるような仕掛けをしている。この点、やや誘導的であったことは否めないが、それを差し引いても回答ぶりは興味深く、有意な考察に繋がった。

テキストの項目は次のとおりである。①金融機関と聞いたとき何を連想するか？ ②金融とはどのような業務なのか？ ③将来的に自分は金融機関とどう関わると思うか？ ④ふだんサービスを実感するか？ ⑤サービスの正体とは？ ⑥サービスを重視することはビジネス・チャンスか？ ⑦リレーションシップとは？ ⑧「ずっと」はどのくらいか？ ⑨関係性を規定するものとは？ ⑩金融・サービス・関係性の相関は何を意味するか？ ⑪経験からの影響とは？ ⑫なぜ経験の殆どない金融取引をイメージできるのか？

続いて、編集に携わった学生スタッフのコメントである。「若い世代は金融機関を利用する機会が少ないからこそ、関係性やサービス提供が重要になると思う（古賀）」「集計作業では金融機関のイメージなど参考になることが多くとても新鮮に感じた（古野）」「この共同研究に携わり金融機関・サービス・関係性の3分野を今までと違う角度から見る事ができた（島田）」「編集作業では、自分の金融知識の乏しさを痛感させられた。この共同研究を通して、金融機関におけるマーケティング理論の適用の実際など、多くのことを学べたと思う。本当に良い勉強になった（長廣）」



▲テキストの表紙（左）と、03ページ「将来的にどう関わるのか？」（右）

3. テキスト納品と次年度の取組事項

3 月末にサブテキスト『サービスと関係性からの実務アプローチ』が完成したことを受け、ひび信の地域創生室を訪ね、小茅室長へ正本 30 部を寄贈するとともに次年度の取組事項について協議した。まず、サブテキストについては、必要部数を増刷しつつ、2021 年度「マーケティング論」「マーケティング論入門」の教材として引き続き使用する。一方、ひび信においても若手職員を対象とした内部研修会などで教材として活用することとなった。

また、初年度は実現しなかったが、本学講義の中でひび信スタッフとの座談会を行う事についても、実施の方向で調整する。さらに、ひび信の内部研修会にも、事業担当者が講師として出向くこととした。特に、サブテキストは最終節で実務におけるインプリケーションをまとめていることから、事業担当者が自ら対応することが望ましいとの判断による。

共同研究 2 年目の実施事項としては、地元中小企業の資金調達の在り方に注目し、実際にひび信の融資取引先の協力を得て、BtoB の視点による金融機関との関係性を検証することとした。但し、調査対象が市内の一般企業であり、アンケートではなくヒアリングが中心となることから、調査にあたる学生の負担感も小さくないと思われる。については、事業担当者の専門演習 2 年に新チームを立上げ、ここが継続して対応する体制を組む。

4. 初年度総括

学生スタッフのリーダー古賀さんは「金融機関を利用する機会が少なかった若者に対しては、関係性やサービス提供に重きを置いたアプローチが有効である。それらに着目することで、長期にわたって利用したいと感じる金融機関との出会いが生まれるはず。このことを実務のインプリケーションとして導けたことは何よりの成果」と述べている。

このコメントに集約されるとおり、今回のアンケートに回答した学生は、金融機関とは何か、地域の金融機関が何を標榜しているか、を自然な形で理解したものと思われる。さらに、金融サービスを通じての地域貢献についても一考する機会を得たはずである。これらを勘案すれば、金融機関への就職希望の有無に関わらず、本取組みは金融リテラシーの教育として有意な場となったといえよう。以上を初年度の活動の総括とする。



▲納品時の記念撮影。小茅室長と村上、左の学生スタッフが古野君

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	教育のまち黒崎推進事業
連携団体名	①特定非営利活動法人 北九州未来教育塾 ②黒崎一番街協同組合・黒崎名店街協同組合
団体代表者氏名	高木 克昭（上記①の理事長） 藤戸 哲谷（会長②の会長）
本学教職員氏名	藤野 博行（法学部助教）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>黒崎商店街は、国家戦略特区（国家戦略道路専用事業）の指定を受けており、これを活用したさまざまなイベントを実施している。</p> <p>令和元年度は、本連経費により、八幡西区黒崎地域において①「黒崎マルシェ」周知のためのポスター作成、②子どもを対象とした迷路イベントの開催（西日本新聞令和元年8月19日掲載）、③地域における「きういカレー」の販売等を行ってきた。</p> <p>しかしながら、これらの活動を実施する中で、多くの課題が発生した。そこで、令和2年度は課題の解消を試みながら、地域の賑わいづくりと学生のコンピテンシー及びリテラシーの更なる向上を図ることを事業目的とする。</p>
取組概要	<p>2020年度は、以下の活動を通して、学生のリテラシー及びコンピテンシーを向上させる予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴う緊急事態宣言の発出により、学生の学外活動が禁止となった。また、商店街や企業側もイベントやインターンシップができない状況に陥ったため、</p> <p>（1）「黒崎マルシェ」における活動、（2）「きういカレー」の製造・販売、（3）企業との連携の活動については実施ができなかった。しかし、商店街側と協議のうえ、以下の活動を実施した。</p> <p>（実施活動）</p> <p>「曲里の松並木清掃ゲーム」</p> <p>黒崎カムズ商店街では、黒崎地域を訪れる人たちの回遊性を高め、商店街地域を活性化するために、長崎街道曲里の松並木公園（市指定史跡）の魅力化のための活動を行っている。そこで、本学法学部開講科目である「社会実習1」の活動の一環として松並木の清掃活動に協力した。本活動の意図は、まちづくり活動への貢献をしながら、学生の企画立案力および実行力を涵養する点にある。</p> <p>具体的には、科目履修者に、楽しみながら清掃をする方法（清掃を「ゲーム化」するためのアイデア）をグループワーク等により考案してもらった上で実行した。</p>

事業 (活動) 内容	<p>本活動は、2020年10月18日、25日、31日、11月21日に実施した。3日間の参加者は学生90名、教員9名の合計99名（いずれも延べ数）である。</p> <p>(1) 10月18日(日)、10月25日(日)</p> <p>清掃ゲームを考案するためには、事前に会場の環境（ゴミの種類、量、地形等）を把握しておく必要があることから、商店街のボランティアの方々と一緒に清掃を行った。まず、商店街組合の会長からゴミの分別などについて説明を受けた上で、3時間ほど清掃活動を実施した。</p> <p>(2) 10月31日(土)</p> <p>事前清掃で得た知見をもとに、清掃ゲームを考案するためのグループワークを実施した。</p> <p>まず、担当教員から、商店街の方達が曲里の松並木公園をなぜ清掃しているのか（黒崎地域の現状と、来訪者の回遊性の向上）について話をした後、6人前後のグループに分かれて清掃ゲームを考案した。</p> <p>グループワーク後に、各グループが発表を行った。その結果、以下のゲームを行うこととなった。</p> <p>①清掃ビンゴゲーム</p> <p>ビンゴゲームの数字の部分をゴミの種類に置き換え、指定されたゴミを拾ってきたらその部分に穴を開ける。</p> <p>②軽量ゲーム</p> <p>目分量で5キロに一番近いゴミを集めるゲーム。</p> <p>(3) 11月21日(土)</p> <p>ゲーム当日は、午前9時に集合した。出席を取った後、清掃ゲームおよび軽量ゲームを実施した。お昼休みを挟み、15時まで実施した。最後に優秀グループの表彰をした。</p>
効果 ・ 結果	<p>(1) 学生が黒崎地区の現状を理解する</p> <p>実習中に課したレポートの記述から、実際に地域課題に触れることにより、身近な地域のまちづくりに関する問題について意識する機会を、学生に提供することができたと考える。</p> <p>(2) 学生の企画立案力および実行力の涵養</p> <p>本企画内容については、学生が企画・実施の中心を担い、教員は実施についてのファシリテートに止めることにより、学生に自主的な活動を促し、企画立案力及び実行力涵養ができたと考える。</p> <p>(3) 清掃による公園の美化</p> <p>清掃ゲームにより200袋ほどのゴミを集めることができた。また、街道脇の側溝は長年にわたり完全に埋まってしまっている状態であったが、ほとんどの部分の土を掻き出すなど、公園の美化に貢献することができた。なお、清掃ゲームについては西日本新聞令和2020年12月22日朝刊に掲載された。</p>

(1) 10月18日(日)、25日(日)

事前清掃の様子。



写真1 会長から説明を受ける

(2) 10月31日(土)

清掃ゲームの考案の様子。

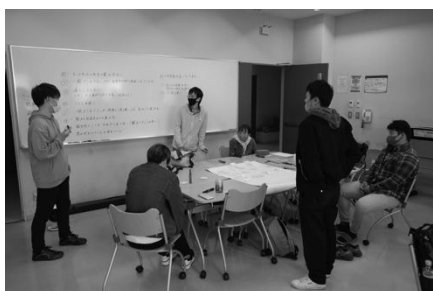


写真2 グループワークの様子



写真3 発表の様子

(3) 11月21日(土)

清掃ゲーム当日の様子。



写真4 清掃ビンゴの様子



写真5 軽量ゲームの様子



写真6 集められたゴミ(一部)

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	～スポーツで地域交流～
連携団体名	独立行政法人 国際協力機構 九州センター NPO 法人 北九州フットボールクラブ
団体代表者氏名	植村 吏香 靱井 徹
本学教職員氏名	木下 温子 （現代ビジネス学部助教）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>2014年11月より本学女子サッカー部の創設に伴い、女子・女性がサッカーをする環境を提供することを目的に、月1回サッカー教室を開始した。これは（公財）日本サッカー協会の承認を得て、「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」として行い、今年で7年目となる。なお、コーチとなる学生は、1年次の終わりに（公財）日本サッカー協会公認「キッズリーダー」の資格を取得する中で、発育発達期に必要な知識やコーチング法を座学で学び、動きづくり、ボールフィーリング、ボールコントロール、ゲームなど実技を学んでいる。この活動には、海外からの JICA 九州研修員へ参加を募ることで、サッカーによる国際交流のきっかけとしている。また、JICA 九州訪問は、JICA を知るため、JICA 研修員がどのような存在なのかを知るために行っている。</p> <p>2016年1月からは「グラウンド・ゴルフ」を開始し、地域住民の方との交流を目的として行い、今年で4年目を迎える。また、NPO 法人北九州フットボール主催の「グラウンド・ゴルフ大会」には運営スタッフと派遣し、外部団体との連携・協力も図っていた。</p> <p>しかし、大学は新型コロナウイルス感染拡大予防対策により遠隔授業となり、実技、実習系の活動に制限が生じ、満足には活動ができない状況であった。</p>
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ JICA 九州施設訪問 ・ 清掃活動 ・ JFA なでしこひろば in 九州国際大学 ・ めがせファンタジスタ！ボールを意のままに ・ 大学構内に花を植える ・ 大学界限ウォーキングコースの提案

事業 (活動) 内容	<p>【開催可能な事業について企画案の作成など】</p> <p>5月～9月</p> <p>【具体的な打ち合わせ】</p> <p>10月6日(火)、10月20日(火) 企画案、感染予防対策</p> <p>10月27日(火) めざせファンタジスタ (プレ活動)</p> <p>11月10日(火) プレ活動の反省・改善</p> <p>12月1日(火) 次回の役割分担、作業工程の打ち合わせ</p> <p>【活動内容】</p> <p>12月8日(火)</p> <p>① 第1回目「やはた一斉ゴミ拾いデー」</p> <p>② 除草作業、お花の植え付け</p> <p>12月15日(火)</p> <p>JICA九州施設訪問</p> <p>12月20日(日)</p> <p>③ 「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」開催</p> <p>「めざせファンタジスタ！ボールを意のままに」参加者6名</p> <p>1月19日(火)</p> <p>全体のまとめ、改善点</p>
------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

効果・結果	<p>① 大学周辺で個人が密を避けてできる運動の提案として「ウォーキングコース」を検討した。しかし、実際に計測し、地図の作成までには至らなかった。企画の中では、ウォーキングによる効果として身体的、精神的な改善も予想されるが、歩くついでに「ゴミ拾い」をし、きれいな街づくりに繋げることを考えた。</p> <p>これは、第1回目「やはた一斉ゴミ拾いデー」に繋がり、『JICA九州に集合し、9:00 スタートで「みんなで一緒に八幡をキレイに」をキャッチフレーズに八幡にちなんだ「8」を八幡の日と制定し、ゴミ拾いを行った』として、JICA九州の公式HPに紹介された。</p> <p><u>毎月8日はやはたの日☆ やりました！第1回『やはた一斉ゴミ拾い』 2020年度 トピックス JICA九州 - JICA</u></p> <p>今後も毎月「8」のつく日は活動を予定とのことであるため、継続的に参加し、恒例行事としていきたい。</p> <p>地域の方と交流は難しいため、地域の方が明るい気持ちになるような提案として、大学敷地が道路と面している敷地の「除草作業」、「花の植え付け」を行った。作業の最中には、通りがかりの方から「草がボウボウ生えているのが気になっていた。きれいになって嬉しい。」や「かわいいお花を植えてるんやね。今後から通るのが楽しみ。」など、次から次に声をかけてもらうことができ、これだけでも一定の効果があったと考えられる。</p> <p>なお、「やはた一斉ゴミ拾いデー」の後、同日活動したこともあり、JICA九州公式HPに、本活動も紹介された。</p> <p>また、今後はこの景観を維持でき、四季折々の花が楽しめるようにと、「北九州市市民花壇」に申請をしている。</p> <p>② 「JFA なでしこひろば in 九州国際大学」は、サッカーによる接触、密接を避ける方法として、個人の技術を高める内容を検討し、「JFA めぎせファンタジスタ」を採用した。これは指定された技術をクリアすることでステージをアップすることができる検定会となっている。2020年度全国で初めて開催として、JFA公式HPに紹介された。</p> <p><u>JFA チャレンジゲーム 今年初の検定会開催決定！ JFA 公益財団法人日本サッカー協会</u></p> <p>クリアすれば、参加者本人の名前がJFA公式HPに掲載されることもあり、参加者から大変喜ばれる結果となった。</p>
-------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



『8』の日 清掃活動



除草作業+植え付け

活動記録



開花！



JFA なでしこひろば

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	防犯・防災教育及び地域安全マップ活動活性化事業
連携団体名	北九州市安全安心推進課
団体代表者氏名	南 秀幸（課長）
本学教職員氏名	姜 信一（法学部教授）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>九州国際大学法学部では、3年・4年の姜ゼミ（学外活動ではKITAMAPという名称を使用）を通して、小学校の子どもたちを対象に、地域安全マップ活動を過去10年以上行ってきた。北九州市の小学校を中心に、大学生が大学で学んだ犯罪機会論に基づいて、通学路や普段の生活圏の中で、安全な場所と危険な場所を見分ける力をつけさせる防犯教育を行っているのである。</p> <p>この地域安全マップ活動は、大学生たちが自ら企画し準備し、小学生にプレゼンテーションとフィールドワークを行う教育活動であるため、大学生にも教育的な効果が高く、特に問題解決力や協調性を高める効果がある。なお、この活動は、学内外に高く評価され、毎年北九州市をはじめとして、福岡県や北九州市外の小学校からも活動依頼を受けている。</p> <p>したがって、本事業は、今までの地域安全マップ活動を持続的に行うことで、小学生の防犯意識を高め、大学生の地域参加活動を通して実践力やリーダーシップ、課題解決力を向上させるという教育的な目的がある。</p> <p>なお、成人を対象にした防犯教育として実施することや九州国際大学方式の地域防犯活動のためのマニュアル作成をすることまで、地域防犯事業を広げて行く目標を持っている。このような防犯教育活動を、より定着させるため、地域連携推進事業として申請するに至った。</p>
取組概要	<p>2020年度は、コロナ感染拡大によって小学校への訪問が全面中止となり、北九州市での地域安全マップ活動は、残念ながら実施できなくなった。</p> <p>そんな中、福岡県教育庁生活安全課からの依頼があり、学生による防犯ボランティア教育とデジタル地域安全マップ作成活動に学生たちが参加することになった。特に、「福岡県学生防犯ボランティア連絡会議」では、参加者に対して法学部の学生たちによる防犯教育を行うなど、「防犯教育と地域安全マップ活動」に重点をおいて活動することになった。</p> <p>また、「地域安全マップ活動」を地域に普及するために、「地域安全マップ活動マニュアル」を作成する作業にも取りかかった。</p>

事業 (活動) 内容	<p>3・4年姜ゼミの学生たちは、福岡県主催の「福岡県学生防犯ボランティア連絡会議」に積極的に参加する一方、連絡会議では参加した福岡県地区の大学生や関係者たちを対象に姜ゼミの学生たちが「防犯教育」および「地域安全マップ指導活動」について講師として紹介するなどの活動を行った。</p> <p>そして、福岡県生活安全課では、デジタル防犯マップを作成し、そのテスト的な運用を姜ゼミの学生たちと一緒にを行った。その活動を通して、ITを活用した防犯活動の可能性をうかがうことができた。</p> <p>このような活動を通して、大学生たちは、オンライン手法を積極的に活用して、わかりやすいパワーポイント資料と動画の作成、そして配信する方法などについての理解も深めた。</p> <p>それに九州国際大学のリスクマネジメント実習では、小学生向けの分かりやすい防犯教育動画の作成にも試みて、学内での発表も行った。</p> <p>そして、姜ゼミの4年生たちは、地域安全マップ活動の活動方法についてわかりやすいマニュアルを作成した。このマニュアルは、4～5年間の活動を通して身につけた経験を整理し、犯罪機会論、CPTED、割れ窓理論などの防犯理論の内容も加えた実用的な学習活動資料としてまとめたのである。</p> <p>昨年度に比べ、対面活動が制約されている中で、今年度はオンライン手法を積極的に活用しながら、活動を進めることができた。</p> <p>以上の活動についての具体的なスケジュールは、以下の通りである。</p> <p>① 9月25日 北九州市主催「地域安全マップ作りリモート会議」参加</p> <p>②10月9日 第1回福岡県学生防犯ボランティア連絡会議</p> <p>③10月30日 第2回福岡県学生防犯ボランティア連絡会議 (地域安全マップ活動紹介及び防犯教育の実施)</p> <p>④11月16日 第3回福岡県学生防犯ボランティア連絡会議</p> <p>⑤12月22日 第4回福岡県学生防犯ボランティア連絡会議 (デジタル防犯マップ活動報告)</p> <p>⑥9月～2021年2月 リスクマネジメント実習(防犯教育動画作成)</p> <p>⑦4月～2021年2月 地域安全マップ活動マニュアル作成</p> <p>⑧2021年2月25日北九州市主催「地域安全マップ作りリモート会議」参加</p> <p>⑨2021年3月10日北九州市主催緑ヶ丘中学校地域安全マップ活動参加</p> <p>以上のように、地域安全マップ活動だけでなく、報告、発表や情報収集活動も多数行った。</p>
------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

効果・結果	<p>今回は、コロナ禍の影響で、オンライン手法による活動が多かったが、福岡県内の防犯ボランティア活動を行う学生たちとの交流と防犯教育を行うことができた。また、姜ゼミの学生たち(KITAMAP)は、コロナ禍の状況が安定してくると、いつでも活動ができるように、常に地域安全マップ活動の準備を行ってきたので、参加学生のレベルや理解度も高い水準で維持することができた。</p> <p>そして、去年に続き、VR など、IT 技術を活用した防犯教育及び地域安全マップ活動の練習を通して活動の手法や内容の改善が行われた。</p> <p>それに、今までの様々な活動の様子と手法などを整理する作業を通して活動マニュアルを作成したので、今後、様々な地域でマニュアルを通して防犯活動を展開できるようになったのではないかとと思われる（地域への貢献）。</p> <p>姜ゼミの学生たちが年々学習した内容を蓄積し、地域の防犯ボランティアを指導できるようになったことも大きな成果である。</p> <p>姜ゼミ(KITAMAP)は、今までの活動成果を認められ、2020年10月3日、福岡県防犯協会連合会より表彰された。</p>
-------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

活動記録

1) 福岡県防犯協会連合会より表彰された



2) マニュアル作成



3) 福岡県学生防犯ボランティア連絡会議

③第3回学生防犯ボランティア連絡会議

「デジタル防犯マップの使い方」

【全体の流れ】

①	10月9日	第1回学生防犯ボランティア連絡会議 「全体の説明会」	リモート
②	10月30日	第2回学生防犯ボランティア連絡会議 「地域安全マップづくり講座」	リモート
③	11月16日	第3回学生防犯ボランティア連絡会議 「デジタル防犯マップの使い方」	リモート
④	11月16日～ 12月中旬	「デジタル防犯マップ」を使ったマップづくり	各自
⑤	12月中	福岡県あんあんオンライン講座（全6回実施）	ウェブセミナー
⑥	12月22日	第4回学生防犯ボランティア連絡会議 「作成したマップのレビュー」	リモート
⑦	2月	地域安全マップづくりリモート講座	会場・リモート

結花

2020（令和2）年度 地域連携推進事業 活動報告書

事業名	学生の意欲の向上および地域住民間交流の促進事業
連携団体名	中央町連絡協議会・結（YUI）
団体代表者氏名	坂本 洋二
本学教職員氏名	栗畑 恭介（現代ビジネス学部助教）
事業費の概要	九州国際大学地域連携センター 地域連携推進費
背景	<p>九州国際大学の学生は、八幡東区中央まちエリアにおいて、地域のイベントや交流事業に参加するだけでなく、中央町連絡協議会・結が受け皿・仲介役となり、学生自身で地域活動を企画・実施するなど実践的な学びを行ってきた。</p> <p>地域活動の担い手としての学生は、若い活力や発想力を期待できる一方で、メンバーが卒入学で入れ替わることや多地域から集まることから、代を重ねた活動やそのための原動力となる地域への愛着を形成することは難しい。</p> <p>特に本年はコロナ禍によって多くの活動が休止となる中で、これまでの活動の主体となってきた上回生の高いモチベーションを維持しつつ、新たに迎える学生の活躍できる土壌を築く必要があった。</p>
取組概要	<p>コロナ禍により予定されていた多くの活動が中止となる中、以下のオンライン及び屋外での活動、また参加人数を限定した取り組みを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■地域活動の担い手とのオンライン交流会の実施 ■ふれあい菜園とその利用イベントへの参加 ■中央町ウィンターフェスティバルへの参画 ■学生による地域活動報告会の実施 <p>なお各取組とも、感染対策を行った上で実施し、ふれあい菜園およびウィンターフェスティバルについては学生の参加は任意とした。</p>

事業（活動）内容	<p>■ 地域活動の担い手とのオンライン交流会（7,8月）</p> <p>YUIのメンバーであり北九州での様々な地域活動に関わっておられる小野山美緒氏を司会・進行役に、地域活動の担い手の方をゲストに招いてトークセッションを行った。</p> <p>目的は、コロナ禍で地域での活動機会が限られる中での地域との接点づくり、地域活動へのモチベーションの維持・向上であり、ゲストには学生と近い目線で話ができる若手や八幡東区長を招いた。また、主体性を持って地域に関わる土壌を築くため、学生自身がゲストを探し招待するアプローチも試みた。</p> <p>■ ふれあい菜園とその利用イベントへの参加（通年）</p> <p>菜園自体は屋外ということで、ジャガイモ（春・秋）、サツマイモ栽培が行われ、11月に地元小学生が参加して収穫祭が行われたが、菜園に付随するイベントは中止となった。</p> <p>そのため学生の関与は各作業のお手伝いにとどまったが、地域側の菜園部会メンバーと学生と菜園横の青空のもとで交流会（11月）を実施し、連絡・交流体制などに対して意見交換がなされた。</p> <p>■ 中央町ウィンターフェスティバルへの参画（会議10,11月、イベント12月）</p> <p>中央区商店街において若者向けのイベントが少なかったことを受けて、新たに企画された。100円商店街や子どもサタデー笑店街など中央区商店街で定期的に行われていた催し一切が中止されていたが、開催にあたっては議論を重ね、実施場所が屋外であること、飛沫などの対策が可能なこと、コロナウイルスの一時的収束もあって、年末での実施となった。</p> <p>企画準備の会議には学生も参加し、貴重な経験となった。また整理要員、消毒要員などコロナ対策のため多くのスタッフが必要となったが、当日は少ない学生が自発的に参加した。</p> <p>■ 学生による地域活動報告会の実施（2月）</p> <p>卒業研究審査会も兼ねた学生による地域活動の報告会を実施した。4年生は昨年、一昨年と本事業の取組の中心メンバーであり、自ら企画、実施した菜園活動や戦災教育について、関係した地域の方を招いての報告を行った。</p> <p>質疑応答では学生と地域との関わり方に対して、学生、地域の方双方から意見が述べられた。</p>
----------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

効果・結果	<p>本年度のコロナ禍の影響は大きく、昨年度からの継続が望まれていた取組や新たな企画は中止となった。地域と学生をつなぐことを大きな目的にした本事業は、4年目となったが、学生の地域活動に対するモチベーションをどのように維持するのか、また特に新たに活動に加わるようになった2年生に対して、どのように意欲を醸成するのかが大きな課題となった。</p> <p>オンライン上でのトークセッションでは、学生からは、地域での実践的な活動再開への想いを強くしたとの感想が聞かれ、意欲醸成に一定の役割を果たしたと考えられる。また、北九州出身の新潟で活躍している方をゲストに招くなど、オンラインならではの交流も行われた。この試みは、意欲喚起や主体性を発揮させる手段としてアフターコロナにおいても有効であると考えられる。</p> <p>また、学生が主体的に働きかける活動は実施できなかったものの、任意での参加となった菜園やウィンターフェスティバルなどでは、積極的に関わろうとする姿勢が見られた。</p> <p>菜園での交流会や活動報告会においては、地域の方と学生が協働における課題を共有した。特に、今年度は学生と地域の方が共有する時間が減少してしまったこともあり、直接相対している地域の方と学生以外には活動実態が見えづらく、当事者以外の方々からは物足りなさを訴える声があること、また学生発の活動の主力となってきた4年生が卒業してしまうことにより、活動意欲の学生間の引き継ぎが大きな課題となることが共有され、今後、双方への情報発信や交流機会を密にしていくことなどが確認された。引き続き、学生の意欲を継続的に高め、より学生が自由な発想で活躍できる土台や枠組みを築くことが求められよう。</p>
-------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

オンライン交流会の様子



会議への学生参加



菜園事業の様子



ウィンターフェスティバルの様子



活動報告会の様子



令和4年3月22日発行

地域課題解決型研究活動報告書

(令和元年度・令和2年度)

編集発行 九州国際大学地域連携センター
〒806-0021
北九州市八幡西区黒崎3-15-3 コムシティ2階
TEL 093-631-2203

印刷所 東筑印刷株式会社

